【ねがいましては】

平成１８年1月１０日
第１８３号　　*KYOWA　SCHOOL*

「ありがとう」

「先生、先生の言っていることと同じことが書いてある本があったの、だからあげる。」

暮れも押し迫った、あるくりランの午前中のことです。高校２年生のＹちゃんから「笑顔とありがとうの魔法」（野坂礼子）ＰＨＰ研究所　という本をいただきました。お菓子のさし入れも忘れずに・・・。何回かこの「ねがいましては」に登場してくれている「駐車場の雑草を制服着たまま採ってくれる子」です。アルバイトが忙しい中、わざわざこの本を渡しに来てくれたのです。このところ頻繁に高校生たちが現れてくれて、それだけでうれしいのに・・・。

彼女はとても明るい性格で、小学校のころなどはキャンプ場へ行く途中、到着までほとんど喋りっぱなしというくらいのおしゃべり屋さんでした。今でも変わっていないようですが・・・。しかし面白いのが、日本語の文法面が何かずれているのです。つまり良くしゃべるのですが、敬語などの使い方などが「シーン・・・。」自分でもそのことは良くわかっているらしく、でも話の中身は明るい・・・。

そんな彼女は、この私のことやこの教室もことをよく理解してくれているのです。感性として理解してくれているわけで、難しい言語を駆使した、大学教授的理解ではありません。

私はその感性が大好きです。人は小さい頃から「友だち」つくりから、初めて他人との人間関係を始めます。あの子と遊びたい、あの子と遊ぶと楽しいから・・・。あの子と遊ぶととても安心していられるの・・・。言葉少ない幼少の頃から、人に対する「好き嫌い」が芽生えます。その判断に「難しいことば」など必要ではありません。感性が働き、人間関係を構築していきます。多くの友だちと触れ合ってきた子たちは、その出会いの中で「尊敬する部分、軽蔑する部分」を感じながら成長します。もちろん「あんな風にふるまえたらいいな、あんな風に・・・。」と、尊敬する子達から多くのお土産をいただきながら成長します。

わたしは良く叱る時に、「そのままだったら友達なんか一人もいなくなっちゃうぞ。」と言って叱ります。人生、家族の次に大切なのは「友だちだ―」、これは私の持論なのですが・・・。つまり友だちって、尊敬できるから友達であって、尊敬できなければその関係はとっくに終わっていると思います。だとすれば、友達が多ければ多いほど、その子は多くの尊敬部分を手に入れようとしますから、益々心の豊かな子に成長するということになります。

ただし土台が必要です。その土台が「家族」であると思います。家族の温かい愛情に満ち溢れた生活があってこそ、子は尊敬や軽蔑の感情を正確に判断できるでしょうし、また、心打ちひしがれている友だちに対し、温かい手を差し伸べることが出来ると思うからです。その手の差し伸べ方も「家族」から学んでいると思うのです。

さて、先ほどの「笑顔とありがとうの魔法」より１節・・・

誰かとの比較は、つらくて醜い心をつくります。
比べないで、そしてあなたのままでいて！
（中略）
今、みんな、見えない根っこを育てることをすっかり忘れて、
性急に花や実という結果ばかり求めて、競争しています。
「有名で高価な花をつけないと、みんなから認めてもらえない、
　早く大きな実をいっぱいつけないと、暮らしが貧しくなる」
そして、タンポポが桜の花を咲かせ、さくらんぼをつけようと
努力して、ストレスいっぱいになっていきます。

どっちが、花として価値があるのか、桜もタンポポもそんなこと
は考えない！
誰に見てもらえなくても、誰にほめてもらえなくても、ただ
淡々と自分を咲かせています。
だから命の光が輝いていて、とても美しいのです。

うまくいかないときに変えるべきなのは、根っこ。土の中深く
に根っこを張ること。

この言葉は、相田さんや、槙原君の「世界にひとつだけの花」と共通しています。
まさに根っことは、「ありがとう」・・・この言葉が自然と張ってくれそうです。「Ｙちゃん」・・・ありがとう